

月夜の晩

ユーモアエッセイ集

丸谷才一

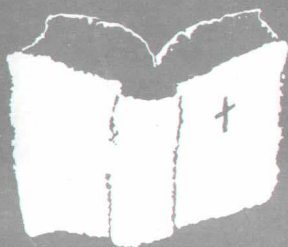


YAMA
Fuji

月夜の晩

ユーモアエッセイ集

丸谷才一



番町書房

月夜の晩

昭和四十九年十月十五日 初版発行

検印廃止

著 者 丸 谷 才 一

発 行 者 村 川 修 二 郎

印 刷 松 濤 印 刷 株 式 会 社

製 本 光 洋 製 本 株 式 会 社

発 行 所 番 町 書 房

東京都中央区京橋三ノ五 一〇四 主婦と生活社内
TEL(五六七)〇三二一(代) 振替 東京 一五八四四

月
夜
の
晩
目
次

I 女性対男性

パーティーの話からパンティの話になりました 12

小説家のサービスの話から結婚の回数話になりました 18

冷蔵庫の話から泥棒の話になりました 24

幽霊の話から家庭教育の話になりました 30

恐怖の話から品のない話になりました 37

タバコの話から年上の女の話になりました 43

怪談の話から男色の話になりました 50

聖書の話から電話帳の話になりました 56

デパートの話から美人コンテストの話になりました 63

国語学の話から見合いの話になりました 69

Ⅱ 大きなお世話——日づけのある随筆

ビリビリ人類史 78

女の肋骨 80

美女 83

遠くて遠い話 86

火の車 89

独裁者と女 91

ニセモノ譚 98

そっくりシヨ ー

お裾分け 104

コンピューター野郎 107

灰とビニール 110

鳴った汽笛が忘らりよか 118

狐は穴あり空の鳥は埒ありされど… 121

ヒマラヤの雪深ければ 126

怪女モリー 129

ハンコとサイン 132

春眠 135

ゴキトラーズ 138

虫のいろいろ 141

S F もどき 144

鰯と鱈と蟹 146

揺れる世の中 149

郵便配達はベルを鳴らさない 152

異説黄門記 155

小指をからめて 158

Ⅲ マイ・スイン

クリスマス・ストーリーについて 162

すれっからしの読者のために 166

長い長い物語について 170

サガンの従兄弟 175

冒険小説について 180

手紙 185

ダブル・ベッドで読む本 189

犯罪小説について 194

フィリップ・マローウという男 198

美女でないこと 203

ケインとカミュと女について 207

男の読物について 212

ある序文の余白に
218

タブーについて
221

新語ざらい
226

装帧
山藤
章二

月
夜
の
晩

I

女性对男性

パーティーの話からパンティの話になりました。

といって、別に語呂あわせについてしゃべっていたわけではない。ぼくが、いつだったかパーティーで、トイレットに行ったとき、ズボンのジッパーが上らなくなって弱ったという体験談をしたのです。これは洗濯に出した直後にはよくある現象だそうで、洗濯屋から帰って来たズボンは念入りに調べ、具合が悪いような場合には、油をさしておかなければならない。そして、シングルの背広とダブルの背広をくらべて、ダブルのほうが圧倒的にすぐれているのは、ズボンのジッパーが上らなくなっても平気であるという点なのである。

ぼくがそんなふうにウンチクを傾けると、女友達が、

「男性にも悩みがあるのね。あたしの友達は、パンティが落っこちそうになって、とっても困ったそうだけれど」

「ほう、パーティーのとき」

「ええ。でも、パーティーのときでなくたって困るじゃない」

「それはもちろん、そうですよ。でも、そんなことって、あるもののかな？」

「それがやはり、あるのよ」

女友達の女友達のケースはこうであります。彼女はあるパーティーに出かけることになっていたが、遅れそうなので大急ぎで仕度をしていた。まず、パンティをはいたが、このゴム紐がゆるくなっている。めんどろくさいので、ゴム紐を結んで短かくした。ところがこの紐が、パーティーの最中、体をちよっとひねったときに、ブツンと切れてしまったのである。

その音は、まるでパーティーの会場全体に響きわたったように（彼女には）感じられた。……

「ふーむ」

とぼくはうなって、

「それは困るね。落ちてゆくじゃないか」

「そうなのよ。それが困るところなのよ」

と彼女も熱をこめた口調で、いたって当り前のことをしゃべり、

「だから、片手をいっしょうけんめい腰のところに当てがって、押えたんですって。大変だったそうよ」

といつてから、

「ねえ。この話、あたしの経験じゃないのよ」

と念を押した。ぼくは、

「大丈夫、大丈夫。君の経験談だなんて、ぜったい思わない」

と請け合ってから、心のなかで、こんなふうに断るところを見ると、案外、自分のことを友達にかこつけて話してるのかもしれないぞ、と思ったけれど、そんなことはオクビにも出さないで、

「なるほど。実際にあり得る話なんですネ。実は、こないだ外国の雑誌で、パーティーのエチケット特集というのがあるって、読んでいたら、パーティーでパンティが落ちそうになったらどうすればいいか、ということが書いてあった。ぼくは、そんなことが起るもんか、なんて、セセラ笑ったんだけど」

彼女はたちまち真剣になって、

「外人でもやはり、パンティのゆるんだ紐をしばったりするのね」

とつぶやいてから、

「で、どうすればいいの？」

こうして、ぼくの、受け売りのエチケット(?)講義がはじまったのです。何しろウロオボエの受け売りであるから、ぼくだって自信はない。それに、自慢じゃないけれど、パンティなんて今まで一度もはいたことはない。だからどの程度、实际的に参考になるかわからないが、しかしすくなくともこの問題を論じた人は、今まで一人だって日本にはいなかったのではないかとす